



「あまり使いたくない日本語・ もっと使いたい日本語」

＝第8回日本語大賞・表彰式を開催＝

日本語の美しさや言葉の持つ力を見直すことにつながる優れたエッセーや作文に与えられる「日本語大賞」（日本語検定委員会主催）の第8回表彰式が、3月5日、文部科学大臣賞の受賞者4人らが出席して東京都北区の東京書籍本社ホールで行われました。

第8回のテーマは小学生、中学生、高校生、一般とも共通の「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」。米国、メキシコ、ドイツ、英国、中国、シンガポール、オーストラリアなど海外15カ国からの265点を含めて、小学生の部2299点、中学生の部387点、高校生の部558点、一般の部235点の計3479点の応募がありました。

第1次、第2次の審査を経て、審査委員11人による最終審査が行われ、小学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、中学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、高校生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）、一般の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）の4部門の各賞が決まりました。



この日の表彰式には▽小学生の部、神奈川県・湘南ゼミナール武蔵中原教室5年、酒田怜実さん(11)▽中学生の部、大阪府・大阪教育大学附属池田中学校2年、西山遥彩さん(14)▽高校生の部、米国・シカゴ双葉会日本語学校補習校2年、島村莉於さん(17)▽一般の部、神奈川県・渡辺恵子さん(81)の文部科学大臣賞受賞者4人が全員出席し、それぞれに賞状、楯、副賞が贈られました。

表彰式は、フリーアナウンサーで審査委員の梶原しげるさんの司会で進められました。主催者を代表してあいさつに立った梶田叡一理事長（奈良学園大学学長、聖ウルスラ学院理事長）は「4人の作品はテーマの絞り方、表現の仕方がすごいと感じた。一つの国の文化、科学技術を含めた知的な力を支えるのは言葉の力。（学校教育の基準として国が定める）学習指導要領でも、すべての学びの土台は日本語の力となっている」と日本社会を支える日本語の大切さを強調しました。審査委員を代表して東京都立広尾高等学校長の佐藤和彦さんが、文部科学大臣賞受賞作品について講評。「4人の作品は自身の体験を踏まえながら日本語に対する考えや気持ちなどを見事に文章にまとめ上げた」と述べ、いずれも審査委員から高い評価を受けたことを報告するとともに、4人の作品それぞれの特長も紹介しました。

次ページへ

第8回「日本語大賞」表彰式レポート

このあと、来賓の文部科学省民間教育事業振興室の伊佐敷真孝室長から表彰状を受け取った受賞者がそれぞれ自分の作品を朗読しました。



▽将棋の対局で勝てると思った相手に逆転負けを喫し、悔しさがこみ上げると言わざるを得なかった「負けました」。この一言には、相手への尊敬の念が込められていると気付いて以来、心を込めて「負けました」を使い、もっと将棋が強くなりたいと願うようになった体験を素直につづった酒田さんの「悔しくて心をこめて」

▽準備不足でコンクールへの出場を決めた吹奏楽部に渦巻く不安や不満。これを払拭しようと、部員でもある作者が「努力」や「頑張る」という言葉で自らを奮い立たせ、仲間との絆も深めながら、成果を収めるまでの過程を、揺れ動く心の描写を中心に繊細かつ軽快なタッチで表した西山さんの「今日も自分にかける言葉」



▽かるたに記された短歌の意味を調べるうちに、日本人ならではの豊かな感性やきめ細かな心情、ひたむきな生き方までもが反映されている大和言葉の魅力に気づき、日本が世界に誇るべき固有の文化で、歴史に思いをはせることもできる日本人の財産として大切にしたいと訴えた、島村さんの「大和言葉」


▽にぎやかな祭りをはじめ四季折々の行事の日に交わす「お静かな・・・」という田舎言葉には、自然への感謝や敬意、行事を無事に済ませられる喜びなど「穏やかで静かな日和」の意味が込められていると、祖母から母が教わり、自分にも教えてくれた。情景描写を交えながら母との思い出を振り返り、自然への畏敬の念を忘れないでと優しく語り掛ける渡辺さんの「お静かなお日和」



——の順に朗読。一人ひとり読み終える度に会場から拍手が沸き、梶原さんのインタビューに喜びの表情を浮かべていました。

最後に吉中崇之専務理事が閉会の辞を述べ、表彰式は約1時間で終了。ご家族や審査委員らが表彰された4人を囲んで記念撮影も行われました。

(時事通信社 升谷 昇)



第9回「日本語大賞」

テーマ 「ちょっと気になる日本語」

募集期間
平成29年6月1日(木) ~ 9月30日(土)